

幼児教育・保育分野における発達障害関連科目の 授業効果に関する研究

Effect of a subject associated with developmental disorder in the fields of preschool
education and childcare

小 川 圭 子・森 口 由佳子

Keiko OGAWA Yukako MORIGUCHI

【要旨】

文部科学省の「特別支援教育体制整備等状況調査結果」より、幼児教育における発達障害のある子どもの保育は急務であることが報告され、支援体制の整備や養成課程の見直しが課題である。本研究では、保育者養成校の必修科目である「障害児保育」(演習)の授業でどのような授業内容が、スキルアップにつながるのかを把握するために質問紙を使用して「発達障害児の知識」、「子どもの保育上の対応」、「就学先の決定」、「園内の協力体制」に関する28項目について5件法で習熟度を測った。初回授業時における学生の習熟度と最終授業を終えた際の習熟度の比較、および、学生の受講過程の変容から、特別支援教育の一環である、発達障害児保育の理解促進をめざした授業内容の有効性を検討した。その結果、学生が講義を聴くことや演習をすることで、習熟度は高くなっていた。特に、「言葉かけ」、「絵カード」、「行事参加法」、「他の子をたいた時」、「遊びの種類」、「指導の計画」、「居場所作り」などの実践項目に関する習熟度が高くなっていた。

キーワード：障害児保育、質問紙調査、授業効果、学生、習熟度

I. はじめに

文部科学省の「平成19年度特別支援教育体制整備等状況調査結果について」(2008)では、「小・中学校に比して、幼稚園・高等学校における体制整備に遅れが見られる」と指摘されている。また、2010年4月発表の文部科学省「平成21年度特別支援教育体制整備等状況調査結果について」においても同様の指摘がなされている。

幼児期における障害のある子どもの保育は、将来の自立と社会参加のために必要となるさまざまな力を育む上での基盤を形成する。そのため、一貫した教育や支援の出発点となる幼児期における指導・支援を充実させることは極めて重要であり(柳澤, 2009)、障害のある子どもの社会性、認知、運動、コミュニケーションの発達を促し(Bailey&Wolery, 1992)、二次的に生じる障害の予防につながる。

学校教育法に基づき文部科学省が示している幼稚園教育要領には、教育課程の編成や指導計画の作成にあたっては、各幼稚園が従わなくてはならない保育内容が示されている。

具体的には、新幼稚園教育要領は、旧幼稚園教育要領（以下、旧要領）の連携の相手が「家庭及び専門機関」から、新要領では、「特別支援学校」、「医療、福祉などの業務を行う関係機関」に変更されており、関連分野との連携が強調されている。次に、旧要領では、「障害の種類、程度」に応じる指導は特殊教育が対象とした障害の範疇であったが、新要領では、「幼児の障害の状態」とし、子ども一人一人の教育的ニーズに応えることを示している。さらに、旧要領では、「交流の機会」とし、幼稚園に在籍する障害児を含めたすべての子どもと、盲、聾、養護学校に在籍する障害児との交流教育の必要性を示していたが、新要領では、「活動を共にする機会」として、協同学習の必要性に転換している。また、「指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと」とし、担任教諭（もしくは加配教諭）一人で障害児の指導を抱え込むのではなく、園内全体を挙げて指導に取り組むことを求めていることを示唆している（國本，2008）。

次に、厚生労働省が保育所保育の理念や保育内容、保育方法などを示めた保育所保育指針では、保育所は制度変遷に伴い、従来の就労家庭の乳幼児に対する保育を中心とした実践から、広く一般の子育て家庭へ向けた支援を担うことになり、その機能が拡大し障害児保育の充実が求められるようになった。具体的には、新保育所保育指針（以下、新指針）は旧保育所保育指針（以下、旧指針）に比べて、章構成が大きく変わった。旧指針の「第13章保育所における子育て支援及び職員の研修など」が、新指針の「第6章保護者に対する支援」となり、障害のある子どもの保護者に対する支援の必要性を強調している。さらに、新指針では第7章で具体的に「保育者の研修」についてを採り上げ、その重要性がより一層強調されている。

このように、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」とともに、専門的な知識や技術をもって障害のある子どもを指導、援助するように教育内容が位置づけられている。しかし、現状は保育者養成校を卒業して保育者になった際に大学で学んだことが実際に活かされていないため、多くの悩みを抱えている新任保育者がいる。水野・徳田（2008）によると、3割以上の新任保育者が集中力に欠ける子ども、落ち着きのない子ども、すぐに保育室をとび出してしまう子ども、排泄を自分でできない子ども等、保育者の指示を理解できない子どもへの対応がわからないために、どのように指導すればよいのかに悩み、自信を無くして退職してしまう者がいる実態があることを報告している。つまり、概論で学んだ知識をもとに、具体的にどのように子どもの特性を把握し、保育すべきであるのかを学生が身につけた後に、保育者として就任することが重要である。

さらに、幼稚園に勤務して1年以内の保育者を対象にした保育者養成校（以下、養成校）で発達障害についてどの程度学び、調査時に発達障害をどう認識しているかに関する調査の結果（小川・水野，2009）、養成校では発達障害についてさまざまな科目で学習していたが、「聞いたことがある」程度にとどまり、養成校での教育が保育の場で有効に活用できるような知識として残っていないことが明らかにされている。

Ⅱ. 研究の目的

幼児教育における発達障害のある子どもの保育は急務であることから、保育者養成校の必修科目である「障害児保育」の授業内容が、習熟度の向上につながるかを、初回授業時における

学生の発達障害児保育についての習熟度と、最終授業を終えた際の学生の発達障害児保育についての習熟度の比較検討により把握することを目的とする。

Ⅲ. 研究の方法

(1) 調査対象者

大阪府内の私立B大学、私立S大学の2施設の保育者養成課程をもつ大学において、「障害児保育」(2年次開講科目)の授業を受講している大学2年生計76名(B私立大学は女子40名、S私立大学は女子31名、男子5名の計36名)を対象に質問紙調査を実施した。協力校は、統計解析に必要な対象者数を考慮し選定した。

その際、初回授業時と最終授業時ともに質問紙調査に回答した66名(回収率87%)を母数として表示した。教員が授業終了後にアンケート調査について説明をした後、質問紙を配布し、個別回収した。

(2) 手続き

「障害児保育」の初回授業時および最終授業時に同一内容の質問項目について、障害児保育の知識に関する習熟度調査を行った。授業内容は、項目に含まれた事項について、基本的知識の提供および映像視聴や発達障害のある子どもの遊びのワークショップを実施した。

習熟度の判定は、授業前と授業後に同一の質問項目をもちいた得点の比較から行った。

(3) 調査期間

2013年4月(初回授業時)と2013年7月(最終授業時)。

(4) 倫理的配慮

調査にあたり、研究目的、方法、倫理的配慮、公表の方法について文書を用いて説明し無記名で実施した。なお、授業前後の2回の調査に関する対象者の連結を図るため、中学3年生の担任の名前と高校3年生の担任の名前の両方の記入を求めた。

(5) 調査項目

質問紙は、小川(2013)が保育者を対象に実施した質問紙調査と同様の28項目で行った。

質問項目は、「脳機能」、「養育環境」、「早期発見」、「障害の種類」と代表的な障害である「PDD」・「アスペルガー障害」・「LD」・「ADHD」の4つ、「相談機関」、「言葉かけ」、「部屋の飛び出し」、「絵カード」、「視聴覚的情報」、「行事参加法」、「パニック対処」、「他の子をたたいた時」、「理解の促し」、「遊びの種類」、「指導の計画」、「居場所作り」、「障害受容」、「心理的支援」、「情報交換法」、「就学先」、「就学指導」、「小学校への連絡」、「同僚の協力」、「園内研修法」についてであった。

評定(習熟度得点)は「1. 非常によく知っている」、「2. やや知っている」、「3. どちらとも言えない」、「4. あまり知らない」、「5. 全く知らない」の5件法でおこなった。

尚、統計解析は、IBM SPSS Statistics 19.0Jによりおこなった。分析は、授業前後の習熟度得点に関し、それぞれの平均得点の算出と、その統計値の散らばり具合をみる為の標準偏差を算出した。また授業前後の統計値の差をみる為に対応のあるt検定をおこなった。

Ⅳ. 結果および考察

初回授業時における習熟度について評定した（表1参照）。その結果、学生が発達障害児保育についてどの程度知っているかを数値化した。平均値4.0以上で、あまり習熟されていない度合いが高い項目として、〔Ⅲ－(2)就学指導委員会での話し合い〕、〔Ⅱ－(10)「指導計画」の立案方法〕、〔Ⅱ－(13)心理的支援方法〕、〔Ⅳ－(2)園内研修のあり方や進め方〕、〔Ⅱ－(6)パニックの際の対処〕、〔Ⅱ－(12)障害受容の心理的過程〕の6項目が挙げられた。

特に、子どもへの保育上の対応についての習熟度は低く、発達障害児全般の知識については習熟度は高かった。このことは、これまでに保育者養成校で科目名称は異なっても、重複した内容がさまざまな科目において指導され（上野・松川・小柳，2005；OGAWA，2012）、保育実践に活かした内容ではなかった。つまり、保育者養成校でのカリキュラムは、障害の種類やそれらの状態像を学ぶといった概論にとどまることが多く、学生が卒業後新任保育者として保育の場で発達障害児を前にした時にどのように対応すればよいかといった、現場で活用できる具体的な方法が十分に教えられていない（小林・小沼・徳田，2001）ことも指摘されて同じ傾向にあることは、本研究でも見られた。

表 1. 授業初回時の習熟度

	(n=66)	
	平均値	標準偏差
Ⅰ 障害児（発達障害）の知識		
(1) 脳機能の障害であってその症状が生まれつきのものであること	2.79	.90
(2) 養育環境に問題があったために起きるものでないこと	2.79	.89
(3) 早期に障害を発見し、適切な療育・教育を行うことの効果	2.97	.80
(4) 発達障害に含まれる障害の種類	3.24	.93
(5) 発達障害のそれぞれの特性	3.94	.80
①PDD（広汎性発達障害）	3.12	1.07
②アスペルガー	3.02	.98
③LD（学習障害）	2.88	1.05
④ADHD（注意欠陥多動性障害）	3.53	.92
(6) 保育者が相談できる機関		
Ⅱ 子どもの保育上の対応について		
(1) 保育者の話を聞けない子どもに言葉をかけるときの配慮の方法	3.82	.78
(2) 活動の途中で部屋を飛び出してしまう子どもへの対応	3.86	.74
(3) 絵カードをどのような時に活用すればよいのか	3.76	.86
(4) 今は何をする時なのか、いつ終わるのかなど視覚的な情報を交えて指示を出す方法	3.77	1.01
(5) 行事（運動会やお遊戯会など）にどのように参加させたらよいのか	3.73	.92
(6) パニックを起こした際の対処法	4.06	.86
(7) 周りの子どもをたたいてしまったときの注意の方法	3.33	.92
(8) 他の子どもたちに発達障害児について理解をうながす方法	3.79	.83
(9) 発達障害児が他の子どもと一緒に遊ぶことができるような遊びの種類や方法	3.74	.90
(10) 「個別の指導計画」の立案の方法	4.23	.86
(11) 発達障害の子どものための「居場所作り」の方法	3.94	.94
(12) 発達障害児を持つ保護者の障害受容の心理的過程	4.02	.97
(13) 発達障害児の保護者を心理的に支援する方法	4.20	.71
(14) 発達障害児の保護者との情報交換の仕方	3.80	.95
Ⅲ 就学先の決定について		
(1) 就学先をどうするかについて保護者と何をどのように話し合うか	3.94	1.12
(2) 就学指導委員会でどのようなことが話し合われるのか	4.39	.76
(3) 就学するにあたり、小学校に何を伝えたらよいのか	3.88	.99
Ⅳ 園内の協力体制		
(1) 同僚の保育者とともに協力して発達障害児を保育すべきか	3.97	.82
(2) 保育の資質を向上させるための、園内研修のあり方や進め方	4.14	.78

また、最近、テレビ等のメディアで発達障害について取り上げられる機会が多くなってきたため、聞いたことはある程度で、大まかな内容は知っていると考えられる。しかし、幼稚園、保育所、認定こども園などの保育の場で、具体的にどのように子どもとかかわればよいのかについての技術に関する知識については、身についていない。

最終授業時における習熟度について評定した（表2参照）。その結果、発達障害児保育に関するすべての項目について習熟度が高くなっていた。

表2. 授業最終回時の習熟度

(n=66)

	平均値	標準偏差
I 障害児（発達障害）の知識		
(1) 脳機能の障害であってその症状が生まれつきのものであること	2.02	.51
(2) 養育環境に問題があったために起きるものでないこと	2.26	.71
(3) 早期に障害を発見し、適切な療育・教育を行うことの効果	2.20	.79
(4) 発達障害に含まれる障害の種類	2.23	.72
(5) 発達障害のそれぞれの特性 ①PDD（広汎性発達障害）	2.77	.76
②アスペルガー	2.41	.74
③LD（学習障害）	2.15	.71
④ADHD（注意欠陥多動性障害）	2.12	.71
(6) 保育者が相談できる機関	2.76	.81
II 子どもの保育上の対応について		
(1) 保育者の話を聞けない子どもに言葉をかけるときの配慮の方法	2.47	.66
(2) 活動の途中で部屋を飛び出してしまう子どもへの対応	2.44	.75
(3) 絵カードをどのような時に活用すればよいのか	2.05	.59
(4) 今は何をする時なのか、いつ終わるのかなど視覚的な情報を交えて指示を出す方法	2.12	.73
(5) 行事（運動会やお遊戯会など）にどのように参加させたらよいのか	2.53	.79
(6) パニックを起こした際の対処法	2.58	.86
(7) 周りの子どもをたたいてしまったときの注意の方法	2.55	.68
(8) 他の子どもたちに発達障害児について理解をうながす方法	2.55	.66
(9) 発達障害児が他の子どもと一緒に遊ぶことができるような遊びの種類や方法	2.26	.66
(10) 「個別の指導計画」の立案の方法	2.58	.79
(11) 発達障害の子どものための「居場所作り」の方法	2.15	.83
(12) 発達障害児を持つ保護者の障害受容の心理的な過程	2.32	.73
(13) 発達障害児の保護者を心理的に支援する方法	2.50	.69
(14) 発達障害児の保護者との情報交換の仕方	2.30	.70
III 就学先の決定について		
(1) 就学先をどうするかについて保護者と何をどのように話し合うか	2.32	.64
(2) 就学指導委員会でどのようなことが話し合われるのか	2.85	.75
(3) 就学するにあたり、小学校に何を伝えたらよいのか	2.30	.61
IV 園内の協力体制		
(1) 同僚の保育者とどのように協力して発達障害児を保育すべきか	2.35	.71
(2) 保育の資質を向上させるための、園内研修のあり方や進め方	2.64	.80

特に平均値2.5以上で習熟度の平均値が高かった上位5項目は、[Ⅲ-(2)就学指導委員会での話し合い]、[Ⅰ-(5)-①PDD]、[Ⅰ-(6)相談機関]、[Ⅳ-(2)園内研修のあり方や進め方]、[Ⅱ-(6)パニックの際の対処]、[Ⅱ-(10)「指導計画」の立案方法]、[Ⅱ-(5)行事参加法]、[Ⅱ-(7)注意の方法]、[Ⅱ-(8)理解を促す方法]であった。続いて、これら28項目に関して、初回授業時と最終授業時の習熟度得点の比較（対応のある*t-test*）を行った（表3参照）。その結果、すべての項目の習熟度得点に有意差が認められた（ $p<.001$ ）。

表3. 授業初回時と最終時の習熟度得点差

(n=66)

[キーワード表示]	平均値	標準偏差	t値	自由度	p値
I 障害児の知識					
(1) 脳機能	0.77	0.97	6.45	65	<.001
(2) 養育環境	0.53	1.08	3.97	65	<.001
(3) 早期発見	0.77	0.93	6.79	65	<.001
(4) 障害の種類	1.02	1.14	7.21	65	<.001
(5) 特性：①PDD	1.17	1.05	9.06	65	<.001
②アスペルガー	0.71	1.03	5.59	65	<.001
③LD	0.86	1.07	6.59	65	<.001
④ADHD	0.76	0.98	6.30	65	<.001
(6) 相談機関	0.77	1.06	5.90	65	<.001
II 子どもの保育上の対応					
(1) 言葉かけの方法	1.35	0.94	11.70	65	<.001
(2) 部屋飛び出しへの対応	1.42	1.07	10.84	65	<.001
(3) 絵カードの活用	1.71	1.08	12.90	65	<.001
(4) 視覚情報による指示	1.65	1.25	10.76	65	<.001
(5) 行事参加法	1.20	1.26	7.75	65	<.001
(6) パニックの際の対処	1.49	1.13	10.71	65	<.001
(7) たいたときの注意方法	0.79	1.06	6.04	65	<.001
(8) 理解をうながす方法	1.24	1.04	9.72	65	<.001
(9) 遊びの種類や方法	1.49	1.10	10.98	65	<.001
(10) 「指導計画」の立案方法	1.65	1.09	12.33	65	<.001
(11) 「居場所作り」の方法	1.79	1.32	11.02	65	<.001
(12) 障害受容の心理的過程	1.70	1.19	11.59	65	<.001
(13) 心理的支援方法	1.70	1.04	13.29	65	<.001
(14) 保護者との情報交換	1.50	1.19	10.22	65	<.001
III 就学先の決定					
(1) 就学先についての話し合い	1.62	1.27	10.34	65	<.001
(2) 就学指導委員会での話し合い	1.55	1.08	11.58	65	<.001
(3) 小学校に何を伝えたらよいのか	1.58	1.14	11.25	65	<.001
IV 園内の協力体制					
(1) 同僚の保育者との協力	1.62	1.13	11.62	65	<.001
(2) 園内研修のあり方や進め方	1.50	1.10	11.09	65	<.001

代表的な4疾患に関する知識の理解得点の差〔表3. I-(5)特性〕、よりも、〔II-(3)絵カードの活用〕、〔IV-(1)同僚の保育者との協力〕、〔III-(3)小学校に何を伝えたらよいのか〕、〔IV-(2)園内研修のあり方や進め方〕、〔II-(4)視覚情報による指示〕などの実践的な項目得点が上昇していた。特に〔III-(3)小学校に何を伝えたらよいのか〕については、特別支援学校の教諭をゲスト講師に招き、特別支援学校の現状や幼稚園や保育園の現場との連携について講義をしていただいたことで、得点が上昇したと考えられる。

表3より初回授業時と最終授業時の比較では、最終授業時に初回授業時よりも全項目で習熟度得点が有意に上昇していた。

〔I-(6)相談機関〕の項目は家庭との連携が求められる項目である。保育者がどのような相談機関があるかについて知らないで発達障害児保育、教育をすることは家庭との連携上においても問題である。また、発達障害児の「自立」のためには、医療と幼稚園や保育所などの保育現場が専門性を発揮し、一体となって子どもの生活を支援することが求められる項目である。より一層の充実が求められる項目であり、子どもにとってもなくてはならない不可欠項目であると考えられる。

学修の効果について、学生が講義を受けることや演習を行うことで、習熟度が高まっていた。さらに、そのことが本当に授業内容を理解しているかどうかという理解の程度については、最

後の筆記試験の結果、全受講生は合格点に達していたことから確認できた。

これらのことから、発達障害児保育について学生として習得すべき障害時保育を実施する技術に必要なことについて、身に付けることができたものと思われる。

V. 今後の課題

15回の授業の結果を分析したところ、学生の習熟度は高まっていたが果たしてこの結果が、新任保育者になった際に実務を行う上で、十分なレベルに達しているのかどうか定かではないが、教職あるいは保育職を目指す学生にとって必要なことは、発達障害に関する十分な知識であり、特別支援教育に対する高い意識である。

今後、学生が授業や実習を経験するとどのような変化が見られるのか、さらに、新任保育者になった際に、養成校で学んだ知識や技術が保育現場で活かしているのかどうかについて、継続して調査をしていきたい。その際の調査内容として必要なことは、学んだ知識や技術が保育現場で活かすことができなかったのはなぜか、どのような場面で活かすことができたのか等である。さらに、発達障害児保育の実践に対応できるワークシートの作成についても検討していきたいと考えている。

【引用・参考文献】

- Bailey, D. & Wolery, M. (1992) *Teaching infants and preschoolers with disabilities* (2nd edition) . New York: Macmillan, 34-62.
- 小林朋子・小沼芳明・徳田克己(2001) 保育者養成校における障害児への対応に関する授業内容の検討Ⅰ－授業方法とその内容について－, 日本保育学会第54回大会研究論文集, 160－161.
- 國本真吾(2008)「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」の改訂にみる今後の特別支援教育・障害児保育の在り方, 鳥取短期大学研究紀要, 58, 7－19.
- 厚生労働省(2008)『保育所保育指針解説書』, フレーベル館.
- 水野智美・徳田克己(2008)就職後3ヵ月の時点における新任保育者の職場適応, 近畿大学臨床心理センター紀要, 1, 75－84.
- 文部科学省(2008)平成19年度特別支援教育体制整備等状況調査結果について,
(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1294016.htm),
最終閲覧日2015年2月.
- 文部科学省(2010)平成21年度特別支援教育体制整備等状況調査結果について,
(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1294016.htm),
最終閲覧日2015年2月.
- 文部科学省(2008)『幼稚園教育要領解説書』, フレーベル館.
- 小川圭子・水野智美(2009) 保育者養成校で扱われている発達障害に関する内容－発達障害に関する新任保育者の知識と困り感との関係から－. 障害理解研究, 11, 11－28.
- 小川圭子・水野智美・徳田克己(2010) 新任保育者が養成校で学びたかった発達障害に関する教育内容, 日本教育心理学会52回総会発表論文集, 755.
- OGAWA Keiko (2012) Educational content relating to developmental disabilities in “Childcare of disabled children” taught in early childhood care and education training schools—From analyzing syllabuses—, The

Asian Journal of Child Care, 3, 41-51.

小川圭子（2013）発達障害児保育に関する保育者の知識の程度（2）一役職別による比較を中心に一，兵庫教育大学幼年教育コース幼年児童教育研究，25，号，13-22.

小川圭子（2014）就学前教育における発達障害児保育の現状と課題，梅花女子大学心理子ども学部研究紀要，第4号，1-11.

小川圭子・矢野正（2014）『保育実践にいかす障がい児の理解と支援』嵯峨野書院.

小川圭子・森口由佳子（2014）「障害児保育」の授業の効果に関する検討－発達障害児保育についての授業前後の習熟度比較－，日本学校心理士会2014年度大会研究論文集，58-59.

上野ひろ美・松川利弘・小柳和喜雄（2005）教員養成におけるカリキュラム・フレームに関する予備的研究－米国・英国・独逸の研究を参考に－，奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要，14，147-155.

付記

本研究は、日本学校心理士会2014年度研究大会（2014年8月8日、文教大学）において発表した報告をもとに加筆・修正を加えたものである。

あとがき

本研究は2名の執筆者が共同して研究した成果であり，担当部分の抽出はできない。

Effect of a subject associated with developmental disorder in the fields of preschool education and childcare

Keiko OGAWA Yukako MORIGUCHI

【Abstract】

“Special education system maintenance circumstantial research results” from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology reported that childcare for children with developmental disabilities in early childhood education is urgent, and maintenance of the support system and review of training course are some issues. In this research, in order to grasp what kind of lesson content in the “Special needs nursing”(practice), which is a mandatory course for childcare provider training school, lead to the skill improvement for the teachers, we measure the learning level of 28 items in “knowledge of children with developmental disabilities”, “how to correspond in childcare for children”, “determining the school”, and “cooperation system in the kindergarten” in a 5 point scale in a questionnaire survey. We examined the effectiveness of the lesson content that aims to promote the understanding of childcare for children with developmental disabilities, which is part of the special education by comparing the learning level at the first class and after the last class in the course and the change in the student through taking the course. As a result, the learning level of the student was higher after listening to the lectures and practicing. Especially, “approaching”, “picture card”, “how to participate in events”, “when they hit other children”, “types of play”, “instruction plan”, and “giving them a place to be” had a higher learning level for the practiced items. Based on these, certain knowledge and techniques on childcare of children with developmental disabilities that should be learned as a student are being acquired.

Keyword : special needs nursing, questionnaire survey, students, lessons effect, learning level

